

エスニック・バウンダリーから「民族集団」を考える

——台湾先住民族サイシャットを事例として——

陳 文 玲

(一) はじめに

台湾では、戦後「山地同胞」と呼ばれてきた先住民族の間で、1980年代から政治、経済、文化、教育などの権利を求める運動が次第に盛んになってきた。「民族名称」、「民族分類」の是正を求める要求もその一つである。1994年に「山地同胞」という総称は「原住民族」と公式に改正されたが、「原住民族」に関して現時点での民族分類が果して適切か否かについては、いまだに論議がなされている。例えば、阿里山に居住している「ツォウ族」は、漢字で「曹族」と書き、「ツァウ」と発音されていたが、彼らの自称「ツォウ」の発音と違っており、「鄒」の発音の方が正しいという理由で、「曹族」から「鄒族」へ改名することを要求した。その結果、1998年11月6日、正式に「鄒族」に改名されることとなった（『南島時報』1998年11月10日）。一方、蘭嶼島に居住している人々は、1898年に烏居龍蔵によって「ヤミ族」と名づけられた。現在では、「雅美族」という。近年、彼らは「ヤミ」という言葉が自称ではないとして、「達悟族」（「タウ」）に改名したいと要望している。この改名はいまだ正式なものではないが、学界、民間のマスコミ、台北市政府原住民族行政局などは、「達悟族」を使っている。その他、「原住民族」のカテゴリーに入っていない「平埔族」の人々からは、自分たちを「原住民族」に加えるようにとの要求の声が上がりがつある。このように、自ら現在の民族名称が適切ではないと主張し、名称の変更を強く要望しているグループがいたり、あるいはある民族集団の一部の人たちがいま規定されている民族集団から自らを切り離し、単独の民族集団になろうとしたりする。そこにさまざまな複雑な問題が絡んで、議論がまとまらず、よりよい案がでるまで現状維持の状態が続いている。

(二) 本論の焦点と射程

そうした上述の社会現象をふまえて、本論文では、現在台湾の西北部山地に居住している「サイシャット」と称される人々が如何に一つの民族集団として称されるに至ったのかを考察することを目的とする。民族集団の境界が如何にして生成しあるいは如何にして決められたのかという問題については、人類学の分野で様々な研究が行われてきた。世界各地域の民族集団の生成過程はそれぞれの国や宗教などの背景によって状況を異にする。台湾の諸民族集団は過去の支配者の統治政策によって民族分類がなされてきた。現在の台湾先住民の民族分類の適切性を考えるためには、各民族集団の文化社会を中心にして研究するだけでなく、その民族集団と絡み合う周辺の民族集団との接触関係及び歴史のいきさつを一層究明することも重要である。これゆえ、本論文では、二つの側面から「サイシャット」という民族集団の本質に近づこうとする。一つは、エティック (etic, 客位的) な観点として、歴史のいきさつを辿って、清の時代に大陸から台湾に

渡ってきた漢民族系の移民と台湾の先住民とがせめぎあう事例を通して、日本植民地時代の台湾先住民族に対する「民族分類」を読み直し、地理的な民族境界の側面から考察することである。もう一つは、一民族集団として名づけられた人たちのエミック (emic, 主位的) な観点として、「サイシャット」の社会的な境界を維持する要素は何なのかを考える。

1980年代後半から、台湾における政治的な環境が急激に変化したことに伴い、各民族集団がそれぞれ固有の歴史を求めるようになった。しかしながら、無文字社会の先住民族の歴史を辿ろうとすれば、漢民族を中心とした文献記録に頼らざるをえず、それらは断片的な記録でしかないため、殆ど、歴史学者の研究対象になってこなかった。近年の研究動向として、日本植民地期以前の台湾の諸民族集団の土地所有関係、民族集団の間のせめぎ合い、台湾の歴史の中の先住民族の位置づけに関して、過去の民族誌的な文献や契約書などが重要な手がかりとして見直されてきた (e. g. 伊凡 1999, 柯 1999, 張隆志 1999, 張士陽 1999 etc.)。本論文は十全な研究とは言えないが、歴史的な文献記録を通し、「サイシャット」の地理的な境界の変容について考察し、一方、社会人類学の視座から、バルトのエスニック・バウンダリー (以下「民族境界」は同義で扱う) 論を使って、社会組織として民族集団を支え、民族境界を維持している氏族 (clan, クラン) という側面から、民族集団の生成の場にアプローチする。

研究事例を語る前に、民族境界の理論について少し触れておきたい。社会人類学の分野において、エスニック・バウンダリー論を最初に民族境界の理論として提示したのは、ノルウェーの社会人類学者フレリック・バルト (Fredrik Barth) である。バルトは伝統的な定説、すなわち、「1人種=1文化=1言語、及び1社会は、他者を拒否し、他と区別される一単位である、というものとその内容において大きな差はない」という公式化が、人間の社会や文化の中でのエスニック集団とその位置づけに対する理解の妨げになる、と指摘している。民族境界を維持する要素こそが民族集団を支える文化の特徴であり、民族の全体像の理解に一步近づくために、文化の核心に関する多元的な考え方が必要なのである、と述べている。バルトは、民族客観論派が重視する集団の言語、人種、生活習慣、宗教等々の文化内容は大きく変化するにもかかわらず、集団間の境界そのものははるかに長く存続するという事実、そして明らかに文化的に異なる特徴をもつと言った場合でも、エスニック・グループとしては一体性を維持している場合があることを重視し、民族の存続のもっとも重要な要因が、日常接触し交差し合う集団間の境界の存在であることを強調した (Barth, 1969)。バルトの論理は台湾における民族境界の事情にすべて適用できるわけではないが、この言説に照らして考えれば、このような境界から民族集団を考察するアプローチは、日本植民地時代から現代にいたるまでの台湾の先住民を「九つの原住民族」として固定してきた「民族分類」に対して、反省的な視点を提供できるのではなかろうか。

周知の通り、1950年代に中国が「民族識別」という民族調査を国内で行っていたが、台湾においては、同様の民族集団の識別や分類の作業が、それより半世紀も早い19世紀末、日本植民地政府によって、台湾支配の初期にすでに行われていた。しかし、日本植民地期の調査結果はかならずしも台湾総督府に採用されたわけではなく、民族分類はいくつかの議論の余地を残したままとなった。戦後、中華民国政府は日本時代の民族分類をそのまま引き継いだ。冒頭に述べたよ

うに、先住民(「原住民族」のカテゴリーに入っていない「平埔族」も含める)が「民族分類」や「民族名称」に対して是正の要求をするのはまさにその不適格さの反映ではなかろうか。一方、研究者側でも民族分類の適切性に関する検討が近年になって行われている(e.g. 山路1996, 1998, 笠原1997, 1999, 陳1998)。

(三) サイシャットの概説

サイシャットは、台湾のオーストロネシア語族に属す諸民族集団のうち、人口数の少ない先住民族であり、その6847という人口数(1996年)は台湾の総人口2100万のうちの僅か0.0003%である。地域としては新竹県の五峰郷、苗栗県の南庄郷と獅潭郷に居住しており¹⁾、周辺のタイヤル族、漢民族などの強大な勢力の民族集団に囲まれて、言葉や生活習慣などの面で、多大な影響を受けてきた。サイシャットという人々は、固有の氏族集団組織があり、かつてほかの民族集団とせめぎあってきたにもかかわらず集団として存続しているその力は、氏族組織及び諸伝統祭祀のなかに潜在すると考えられるであろう。彼らの独特な祭り「パスタアイ」(意識で「こびと祭り」)は、サイシャットの代名詞となっているほど台湾社会に広く知られている。本来は、農耕儀式的の意味が濃厚であったこの儀礼は、現在の台湾の社会において、民族意識の変容とともに新たな象徴的な意味を生じてきた。現在、サイシャットの最も代表的なシンボルとして、民族集団のアイデンティティを維持するのに欠かせない儀礼である。

「サイシャット」という民族集団が、最初に一つのエスニック・グループと識別され、「サイシャット」と名づけられたのは1904年のことであった。日本植民地期の初期に、日本の台湾総督府民政局の事務囑託として派遣された伊能嘉矩によって、漢民族以外の台湾先住民は8部族と分類されたが、「サイシャット」は独立した民族ではなく、「平埔族」の一部とみなされた。伊能は、いまでいう「サイシャット」の部族を「未漢化平埔族」と記述し、「タオカス」という「平埔族」と見なした(伊能/粟野1900)。最初に「サイシャット」の名を挙げたのは、『台湾蕃政志』であり、サイシャットのことを「サイセツ」と記し、「平埔族」の一部として記述した(伊能1904)。つまり、「熟蕃」のカテゴリーに入れられたのである。しかし、植民地政府側はこの調査報告にしたがわず、1911年に台湾総督府蕃務本署が英文で発行した“*Report on the Control of Aborigines in Formosa*”の中では「saisette」と表記され、初めて一つの民族集団として扱われた。行政上「サイシャット」は「生蕃」(いまでいう「原住民族」)のカテゴリーに入れられたのである。

当時、この民族集団がどのように位置付けられるのか、言い換えれば、「原住民族」と「平埔族」(当時の用語は「生蕃」と「熟蕃」)のどちらのカテゴリーに入れるべきかは、ずいぶん研究者や総督府を悩ませたようであった(宮本1987:138)。『臺灣高砂族系統所属の研究』(1935, 以下『系統所属』と略称)の「サイシャット」の調査を担当した宮本は、サイシャットの分類について、当時の事情を次のように語っている。「サイシャットは…どっちに入れてもいいような気がした、(中略)、ともかくはっきりしない。内庄²⁾のサイシャットなんかは、もう漢民族とあまり変わらないんですよ。彼等自身、自分は漢民族だと言ってみたり、違うと言ってみたり、いろいろでわからない。結婚もあちこちと複雑にやってるしね。お祭りなんか見ると、こりゃあどんなこと

したって、漢民族じゃない。調査してみると、やっぱり灰色なんですよ。…それで結局、我々の分類では、サイシャット族ってのは、生蕃に入れて、いちおう線は引いてありますけどね。」(宮本 1987:138)。

(四) 地理的な民族境界

宮本が調査した南庄は、かつて、後に「サイシャット」といわれる人たちが居住していたが、清の時代に、客家の住民の開墾によって、現在の「サイシャット」の境界が形成された。その過程を以下の事例を通して見てみよう。

1840年に台湾の楊梅に生まれ、客家系移民の2世であった黄南球は、1863年に獅頭驛(現在の苗栗県南庄)に移住した。当時24歳の黄南球は、親族が経営する「金萬成」という隘勇墾号³⁾の事務を手伝った。黄は積極的に隘丁を招募、土地の開墾を進めながら、もともと三湾から獅潭までの一帯に居住していた先住民(一部はサイシャットと推測される)を征討し、徐々に先住民の土地を占領した。1876年に清の政府の許可を得て、隘丁を率領して一挙に獅潭に侵入した。その先住民は抵抗できず、馬陵、坑頭両社(現在の苗栗県獅潭郷百壽村に移住しているサイシャットの旧村落)以外の住民は、南庄の紅毛館、八卦力へと退去していった。それで、獅潭の地域には漢民族の村落が形成された。さらに、1876年に「黄南球墾号」を設立し、1881年に清の許可を得て「新竹総墾戸」を設立し、勢力を広め、それにつれ、木材製造、樟腦製造、糖の生産などの産業で繁栄していた。こうした黄南球の勢力に対して、先住民の頭目日阿拐⁴⁾(「日」という氏姓は後にサイシャットといわれる先住民族のものである)は、元来苗栗の頭屋郷沙坪に在住していたが、黄南球の開墾推進に追われ、獅頭驛(南庄)に移住した。そこで、新たに山地を開墾し、樟腦の大手製造を行なった。1884年に南庄にいた先住民が、閩南系の林汝梅の経営していた「金東和」という墾号を攻め、緊迫した状態になった。新竹知事は苗栗にいる黄南球に緊急応援を求めたため、黄は同じ漢民族を助けようとして、攻撃をしかけている先住民を背後から逆に攻めた。先住民は勝つ見込みがないと判断し、獅頭驛を去って、中港溪の向いの南獅里興(苗栗県南庄郷蓬萊村)に退去した(呉 1994:11-25)。そのような経緯で、南庄はすべて客家系の領域となり、一方、サイシャットは中港溪の向うにある蓬萊村に集中的に居住するようになり、現在の南庄においてサイシャットの地理的な境界が形成されたという。

客家だけではなく、他の民族集団とも密接な関係のあったことが伊能嘉矩の初期調査によって分かる。「サイシャット」と「ペイポ族」(伊能の記載で「ペイポ族」もしくは「平埔族」イコール「タオカス」を意味する、以下同様)との関係がうかがえる二つの事例をあげてみる。

1890年代後半から1900年代初期にわたって伊能嘉矩が調査した当時、獅潭方面のサイシャットの一小部族には「ペイポ族」の口碑と符合する口碑があり、毎年祭祖の時には新港社から来たという意味を含む歌を唱え、新港社と同祖の裔であると言われていた(陳 1998:187)。また、サイシャットはタオカス部族に属する一小群であり、其の所属の本幹はタオカスの一部族であることを伊能は示唆した(伊能/栗野 1900:109)。

また、清国時代にすでに分かっていたらしい「ペイポ族」の間に伝わる土地開墾の契約書が

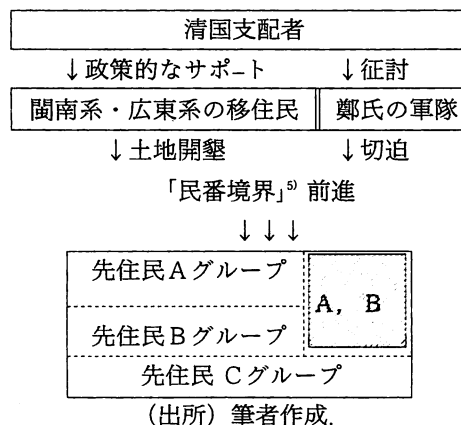
「壘青山契字」である(著者不明, 1908『東京人類学会雑誌』266:310)。伊能によれば, この契約書は「漢族をまね支那化蕃なるペイポ族が未支那化同族なる Saisiett 部族との間に, 豚と酒とを以て土地を交換することを契約せるものなり」という契約書であり, 1872年に新港社番頭人など6人が豚と酒で同じペイポ族のひとの土地を購入した契約である。そこで注目に値する記述は, 契約を結ぶ両方は, 百年余りに分かれ, 氏族関係があることをお互いに認めている。土地契約を結ぶためにお互いの信用を強めて, 「同祖」関係を結び付けたのかも知れない(陳1998:192-193)。

なお, もう一つ注目すべきことがある。サイシャット語では, 「pannah」という言葉がおそらくタオカスのことを指す, と馬淵(1954:309)が示唆しているが, 現在サイシャットもこの言葉を使っている。「平埔」という意味で, とくに「Sawan」(潘あるいは銭の氏姓)の人々を指しているようである。これは, 一部の異なる民族集団の人間が後に「サイシャット」とよばれる人たちと一緒に住んで, 「サイシャット」として, 一つのカテゴリーに入れられたものではなからうか。しかしながら, 『系統所属』の調査結果では, サイシャットとタオカスは関係がないことが示されている(1935:104-015)。このようにサイシャットとタオカスとの関係に関する正反対の言説からは, 「サイシャット」と名乗った人たちが, 伊能嘉矩と30余年の時間を隔てた『系統所属』の調査との間に, 激しく変貌してきた様子がうかがえる。植民地統治によって変化したことも考えられるが, 調査者による調査方法, 調査の地域, 調査された対象など, また, 「民族集団」を識別する基準によって, 民族境界がかなり異なってくることもあるだろう。

ここで, サイシャットと周辺の民族集団との関係について, 以下の図式を提示したい。この図式に関して, この時代には民族名称がなかったので, 説明の便宜上A, B, Cの代称でそれぞれの先住民族を称することにする。先住民Aグループはほぼタオカスに当たり, Bグループはほぼサイシャット, Cグループはタイヤルに当たる。

要するに, 先住民族Aグループ, Bグループ, Cグループは, もともと隣接して居住していた人々であり, その間に一応民族集団的な境界線はあったが, おそらく明快な境界ではなく, 互いの黙認で区別していたものであっただろう。一方, 平地に近ければ近いほど, 漢民族とのせめぎ合いが頻繁に起こっていた。こうした土地の紛争が起こる度に, 次第に境界線が変わっていつ

【図1】1895年以前の「サイシャット」と周辺の民族集団との関係図式



た。「隘勇線」という明瞭な境界線もあった。鄭氏軍隊の背後には清国の征討圧力があり、移住してきた漢民族の背後には、清国の政策的なサポートがあって、両者ともどンドン先住民族との境界線を前進させた。ところで、鄭氏の軍隊に攻められ（1681年）、一部の先住民は山の方へ逃げ込んでいた。原住地に残ったAグループは早々漢民族との接触が進み、さらに清国支配者の招撫で、「熟番」のカテゴリーに入れられ、「隘勇線」の内側に入った。一方、平地と山地の接する地域に住んでいたBグループは「生番」のカテゴリーに入れられ、「隘勇線」の外側、もしくはその間に出入りしていた。ところが、網がけで表わした灰色地域には、Aグループの一部の人々とBグループ一部の人々が一緒になっていた可能性がある。この灰色境界地域にいる人々は互いに集団の区別をしていたかもしれないが、外の人から見れば、AグループかBグループか簡単に区別ができないために、よく混乱や誤解を招いたのではなかろうか。「サイシャット」の先祖と見られる人たちは、かつて現在より広い地域に居住していた。そこで、ほかの民族集団であるタオカス、客家、タイヤルと接触し、婚姻関係や養子関係などの密接な関係が発生していた。これが前掲の宮本のいう「複雑」さの原因となっていたのではなかろうか。

(五) 社会的な民族境界

日本植民地期に民族分類や民族識別が行われ、それによってあらたな民族の概念が生成したとはいえ、もともと一つの「民族集団」としての境界も存在していたのはいうまでもない。サイシャットにおいては、「民族集団」を内側から支えるものはいまでも明確に存在している氏族組織であると言える。この節で、「サイシャット」という民族集団を維持するエミックな要素である氏族組織を考察してみよう。

サイシャットの氏族組織がいつからどのように形成されてきたのかは、まだ研究の途上にあるが、清国時代に先住民の氏族名に漢字を当てて与えられた（伊能 1904:556）、或いは自ら名乗った（波越 1907:141）時点ですでに存在していたことは確実である（陳 1998）。この点に関して、現時点では結論に至らず、いっそう文献調査が必要である。しかしながら、氏族名の現地語の意味とそれに当てた漢字の意味もしくは発音は、ほぼ対応していたということから、これらの人々は漢民族との間にかなりの接触が進んでいたと推測してよいだろう。氏族の名を漢字に変えても、氏族組織が変わらないことは、エミックなバウンダリーであり、つまり、自／他の境目であることも考えられるだろう。清国時代から、先住民（ここでは「サイシャット」のことを指す）は異民族集団もしくは統治者に押し付けられた地理的な境界、集団名称を抵抗できずに受け入れた。しかし他方ではしっかり独自の氏族組織を守って、祭祀を通して氏族同士の関係及び氏族間の関係を強めていた。そこにエミックなバウンダリーが潜在していると考えられる。また、「サイシャット」が民族境界を維持する氏族に関する概念は、血縁関係のみで氏族を継続し維持するわけではなく、氏族組織に個人を編入する手段としての「養子入れ」を通して周辺の異なる民族集団の人も吸収することがある。前掲の「日阿拐」の事例（注4）を参照されたい。

サイシャット語で、氏姓のことは「アハシナヤホ」（ahashinrahyo）といい、同じ苗字をもつ人たちの集団の意味も含める。現在14の固有の氏姓が彼らの社会に見られる。このような氏族に

よって、祖先の祭祀が一緒に行われ、また、同姓同士の結婚はもちろん禁止され、かつて氏族関係があったが分かれて別氏姓になった者同士や、いくつの外婚氏族が決まっている者の他は結婚が厳禁され、いわゆる氏族の外婚規則が守られている。

伊能嘉矩の記録によると、清朝から11種の氏姓が与えられたとあり(1904:559)、一方、古野清人も16種の氏姓名を記しているが、当時、実際にはそのうちの2つの氏姓は存在していなかったという(1975 [1945]:321-328)。現在は、古野の調査とほぼ変わりがないが、戦後、漢姓に変え、同じ氏姓であっても、別の漢姓を持っている場合がある。それぞれに対応する原語と意味については【表1】を参照されたい。

こうした氏族に基づいて構成された社会組織としては、現地語で「aha rito」という最小の集落単位があり、祖先祭祀の集合体として連結関係している氏族(クラン)あるいは分節リネージ関係の人が構成する単位である。数個の「aha rito」がより規模の大きな村落となり、これは現

【表1】 サイシャットの氏姓一覧

漢姓	現地語 ¹⁾	意識	代称
高	ka'iba'ibaw	高い	A
朱	ti:tien	珠	B
夏	Hayawan	意味不明	C
章, 樟	MinrakeS	樟の木	D
解, 蟹	Kakarang	紅蟹	E
日	tanohila :	日	F
豆, 趙	Tawtawazay	豆, ナツ	G
風, 楓, 鄧, 東	ba:baï'	風	H
根	kas? ames	根	I
潘, 銭	Sa:wan	不明	J
絲	ta:taysi'	色染めの糸	K
芎	saynaaSe :	九芎(植物名)	L
胡, 狐	botbotol	狐	M
詹, 蟬	kamlalai?	蟬	N
血 ²⁾	karkarramows		現存
膜	taptapilas		しない
紅 ³⁾	不明		

(出所) 1997年9月新竹県五峰郷大隘村での調査に基づいて作成。

(注) 1) 現地語の表記は、『蕃族慣習調査報告書〔第三卷〕賽夏族』にもとづく。なお、「S」は英文の「sh」, 「s」は「th」の発音を表わす。

2) 日本時代の戸籍資料によれば、「血」の氏姓を持っていたおそらく最後の人「血・アモイ・エテ」は1918(大正7)年に死去(林1997:19)。

3) 『蕃族調査報告書』にはガラワン社の「紅姓」という記録(1920(5):364)があるが、それ以外、「紅」の姓に関する記載はどこにも見当たらないようである。しかし、現在獅潭郷に住んでいるサイシャット豆Tの祖母は「紅」という氏姓であった。おそらく最後の「紅」姓を持っていた人「紅二妹」は1993年に死去した。「紅」姓は、あったことは確かであるが、不思議なことには文献に記載されていない。

地語で「kinasanganu」という。日本時代の記録によると、各「kinasanganu」にはリーダーの「族長」がいる（『蕃族調査報告書』1920:364-365）。つまり、各氏族の間には政治的な連結関係があり、ほかの集団との境界が明確化しているのである。しかし、集落といっても広い地域内に、数軒ずつの家が散居している形で、こうした集落の領域内に、複数の氏姓の人が分散して居住している場合もある。氏族別でそれぞれの集合体が連結する。要するに、一つの集落に同じ苗字を持つ人だけが住んでいることとは限らず、複数の氏姓の人が居住している場合もある。

日本時代の調査・研究（『高砂族調査書』1936(1):66-69, 89-95）によれば、当時のサイシャットは、大規模な集居ではなく、基本的に氏族集団単位で居住している。日本時代には清国時代のような大きな変化はほぼ起こらなかったようである。それまでは、地理的・空間的な分布はかな

【表2】 サイシャットの社会組織と氏族の居住分布との関係

aha wara	村落聯合 aha asang	村落 aha kinasanganu	集落 aha rito ¹⁾	
Sai kirapa (北グループ)	Saiyahoru	rakus	G, B	
		sampsampman	G	
		ru?ha	X	
	Sai kirapa	sipaji	B, J, G	
		sigao	B, J, C, M	
		pirai	A	
Sai maghahybun (Sai namson) (南グループ)	Sai waro	Sai waro	waro	H, A, B, D
			Sewazai	X
			Ororok	J
	Sai raiin	Sai garawan	garawan	H
		Sai parangasan	rarumoan	H, B, L, E
			rarai	H
			Habuh	X
			raiin	J, D, I, C, H, F
			papuarai	X
			parangasan	J, F, I, D, K
			amiS	shopin
	taipin			X
	Tainan			F, J, I, D
	Sai shawe		Invayus	J
			Invawan	J, G
			Karehahyobun	J

(出所) 古野 1945:321-332, 『蕃族調査報告書』1920:364-365, 衛 1956:1-5, 胡 1996:11, 及び1997年4月と9月の筆者による現地調査等の資料に基づいて作成した。

(注) 1) 「aha rito」に居住するクラン或いは分節リネージの姓氏については、表1の氏族一覧の代称と対照されたい。居住者の姓氏は世帯主に準ずる。「X」は未調査または不明である。

り変化が激しいと言ってよいぐらい変遷していた。日本時代から現在まで、移住もまだ少しずつ進んでいるが、それにもかかわらず、氏族関係の連結が途切れることはなかった。

氏族ごとの単位で、集合体が連結する際には、往々にして地理的な境界を越えて、祭祀における連結関係が結ばれる。言い換えれば、地理的な集落の概念よりも社会的な境界の連結関係の方が祭祀という場面においては、強いという特徴が伺える。このように、サイシャットの「民族集団」を内側から維持する要素として、氏族組織及びそれによって行なわれる祭祀というものが、大変大きな役割を負っているということが分かる。つまり、地理的な境界に基づく集落概念よりは、祭祀の連結関係で構成されるわけである。すなわち、社会的な境界の意味が強いと考えればよい。現在の行政境界は、必ずしもこのような連結関係に従うとはかぎらない。さらに、隣接の「kinasanganu」が連合して「asang」(村落聯合に相当する)となり、現在の「村」という行政単位にほぼ相当する。大きな地域では「aha wara」、もしくは「aha buyohyo」というグループになる(衛 1956:2)。サイシャットの現地語地名の社会組織と氏族の居住分布の関係は【表 2】で表わされる(【表 1】氏姓の代称を参照されたい)。

(六) むすび

本論文では、「サイシャット」と呼ばれる先住民は地理的な境界の変容を経て、そして支配者による民族名称がつけられたことによって、いまの民族集団としてのアイデンティティが形成され、民族境界線が鮮明に引かれていることを考察した。土地開墾に押し付けられたバウンダリーと支配者が付けた民族名称が明瞭に打ちたてられることによって、「サイシャット」という民族集団としてのアイデンティティが徐々に明確なものとして生成されてきた。サイシャットにとって民族集団を維持するエミックな要素は、社会組織としての父系氏族制度であり、社会的なエスニック・バウンダリーはこの側面で明瞭なものとして現われていると考える。かつて氏族の単位としてのアイデンティティの次元だった民族境界は、異民族集団との接触を通じ、個々人と民族集団間の関係を構築することによって構成される。こうした相互行為を通じ、個々人のアイデンティティが民族集団の次元に拡大すれば、民族境界が構築されると考える。このような境界の概念においては、様々な利害関係や力関係次第で、相互に協力しあうこともあり、せめぎあうこともしばしばある。それらの面に関する研究は今後の研究課題として一層のフィールド調査が必要である。

今日台湾における民族活性化現象がサイシャットだけではなく、台湾先住民諸族においても盛んになりつつある。だが、現在の台湾社会において、日常接触し合う民族集団の境界に潜んでいるエスニック・アイデンティティはどうなっているのだろうか。過去の歴史において政策的な民族境界が引かれた途端に名付けられ、或いは消された人たちは、現在自らの文化・歴史の正体を求め、民族名称を是正しようと要求している。このような台湾社会のマイノリティーに対して、いまだに満足できる研究は足りないのではなからうか。

- 1) 新竹県五峰郷が「山地郷」であり、苗栗県の南庄郷と獅潭郷が「平地郷」であるから、「山地原住民」と「平地原住民」の世帯数はそれぞれ242戸と423戸である。1945年以降、中華民国政府は、日本時代の「山地行政区」「平地行政区」という行政区分を引き継ぎ、県の下位行政単位である「郷」のうち、先住民の居住地の含まれる「郷」を「山地郷」と「平地郷」に区別している。従って、先住民も「山地原住民」と「平地原住民」の2つのカテゴリーに分けられている。しかし、「山地」と「平地」の境界は民族集団に準じて分けられているのではなく、何を基準とするのか不明確なまま、行政上の便宜で一括して決定されている。
- 2) 「内庄」という地名はサイシャットの居住地域に存在していない、おそらく「南庄」の誤りであろう。
- 3) 清の時代からの「隘勇制度」は、最初は民間の私設で、「民隘」と呼ばれていた。官設隘勇は、あとから導入されたものであり、「官隘」という（王1956:7-8, 李1973:184）。「民隘」の設置場所は、土地開墾の進展に応じて「番界」にどんどん前進する。開墾業者が資金を出し、漢民族同士もしくは「熟番」を雇い、「隘丁」として土地開墾の労働を兼ね、先住民（当時「生番」という）の侵害を防ぐため、隘勇線で監視・防衛をした。こうした「民隘」はうまく発展すると、「官隘」を合併することもあり、規模がだんだん大きくなると組織の名前をつけるようになった。これを一般に隘勇墾号といった。「会社」の名前のように考えればよいであろう。南庄の「廣泰成」、北埔の「金廣福」とも隘勇墾号である。
- 4) 日阿拐は、道光20年生まれ、現地名 Basi-Banual、両親は漢民族閩南系張姓。8歳の時、両親に連れられ、大陸から台湾に渡った。上陸後、両親とも病死。戚姓の人に収容され、その後、サイシャットの「日有来」（Tanoherah・Ubai、別名 Banual・Tahesh、サイシャットと推測される）に売られ、日姓の養子になった。その後、南獅里興社の頭目になった。
- 5) 1722（清康熙61）年に、清国の監察御史黃叔璥が、台湾に移民した福建系と広東系の漢民族と先住民の間の紛争を防ぐために、「民番境界」を引くことを清朝に奏請した（波越1907:311）。「民番境界」とは、漢民族系の「民」と先住民の「番」の境界地である。最初、台湾に渡って開拓した漢民族は、先住民の居住地域の間、境界を示す石碑を立てていたが、さらに、その境界線に溝を掘り、土を盛り、防ぐ壁を作った。このような土の壁が牛背のように見えるので、それは「土牛溝」と称された。その後、漢民族の開拓者が土地の開墾や山の資源を獲得するために、どんどん「土牛溝」を乗り越え、先住民の地域に侵入したので、殺害事件が続出した。清国は事件が発生するたびに境界線を前進させた。

参考文献

和文（あいうえお順）

- 伊能嘉矩・栗野傳之丞 1900 『台湾蕃人事情』 283pp., 台北：台湾総督府民政部文書課
- 伊能嘉矩 1898 「台湾に於ける各蕃族の分布（台湾通信：第二十二回）」『東京人類学会雑誌』146
- 1904 『台湾蕃政志』 283pp., 台湾総督府民政部殖産局, 台北：臺灣日日新報社
- 1904 「臺灣に於ける民蕃の土地的競争」『臺灣慣習記事』4(8):1-8
- 1965〔1928〕『台湾文化志』（全3巻）、刀江書院
- 『番俗志ペイボ族』（仮題）未刊手書き原稿
- 移川子之藏、宮本延人、馬淵東一 1935 『台湾高砂族系統所属の研究』 562+132pp., 台北帝国大学土俗種学研究室, 台北：南天書局（復刻）
- 江淵一公 1985 「エスニック・バウンダリーとスティグマ——ニュー・エスニシティの視角」『文化人類学』2（特集：民族とエスニシティ）、20-33、アカデミア出版会
- 笠原政治 1997 「幻の〈ツァリセン族〉——台湾原住民ルカイ研究史（その1）」『台湾原住民研究』2:21-60、日本順益台湾原住民研究会〔編〕、風響社

- 1999 「ツァリセンか、パイワンか、ルカイか? ——台湾原住民の民族分類をめぐる一問題——」
『台湾原住民国際検討會』台北:中央研究院民族研究所/順益台灣原住民博物館 (未出版)
- 小林岳二 1996 「台湾原住民族」, 模索していく民族像『PRIME』6:53-77, 明治学院大学国際平和研究所
- 1997 「最近の「原住民族」をめぐる情況」『台湾原住民研究』2:263-269, 日本順益台湾原住民研究会 [編], 風響社
- 台湾總督府警務局理蕃課 1986 [1936-1939] 『高砂族調査書』第1編, 第5編 (全6編), 湘南堂書店 (復刻)
- 張 士陽 1999 「嘉慶朝台灣の番社合約字に現れたエスニック・バウンダリー (ethnic baoundary) 形成の契機」『契約文書與社會生活——臺灣與華南社會 (1600-1900) 検討會』中央研究院臺灣史研究所 (未出版)
- 陳 文玲 1998 「「サイシャット」の民族名称に関する一考察」『台湾原住民研究』3:178-196, 日本順益台湾原住民研究会 [編], 風響社
- 土田 滋 1988 「オーストロネシア語族」『言語学大辞典』1:1043-1057, 三省堂
- 1989 「サイシャット語」『言語学大辞典』2:5-7, 三省堂
- 1989 「高砂族諸語」『言語学大辞典』2:572-575, 三省堂
- 波越重之 1907 『新竹廳志』536pp., 台北:台湾日日新報 新竹廳総務課
- 古野清人 1975 [1945] 『高砂族の祭儀生活』466pp., 台北:古亭書屋 (復刻)
- 増田福太郎 1942 『南方民族の婚姻——高砂族の婚姻研究』226pp., ダイアモンド社
- 馬淵東一 1954 「高砂族の移動及び分布 (第1部)」『民族学研究』18 (1・2):123-154
- 1974 [1956] 「高砂族民族史」『馬淵東一著作集』2:503-518, 社会思想社
- 馬淵東一 他 1988 『馬淵東一座談録』278pp., 河出書房新社
- 宮本延人 1949 「台湾新竹州の新港熟蕃部落」『民族学研究』14 (2):79-80
- 1954 「台湾民族学研究史概説」『民族学研究』18 (1・2):81-85
- 宮本延人・瀬川孝吉・馬淵東一 1987 『台湾の民族と文化』244pp., 六興出版社
- 山路勝彦 1996 「文明との邂逅と平埔族の漢化」『台湾原住民研究』1:5-74, 日本順益台湾原住民研究会 [編], 風響社
- 1998 「蜉蝣の認同, 祖先からの出奔——漢族でもなく, シラヤ族でもなく (1)」3:15-53, 日本順益台湾原住民研究会 [編], 風響社
- 臨時台湾旧慣調査会 1983 [1920] 『蕃族調査報告書』(第5卷) 佐山融吉 [編], 台北:南天書局 (復刻)
- 著者不明 1908 「壑青山契字」『東京人類学会雑誌』266:310
- 中文 (筆劃順)
- 中央研究院民族研究所 [編譯] 1998 『番族慣習調査報告書 [第三卷] 賽夏族』159pp.
- 王 世慶 1956 「台湾隘制考」『臺灣文獻』7 (314):7-25
- 巴蘇亞 1998 「中央核定曹族正名為鄒族」『南島時報』12月10日第1版
- 伊凡・諾幹 1999 「日治初期之林野經營與'tayal [msbtunux] qara 土地所有的變化」『台湾原住民国際検討會』台北:中央研究院民族研究所/順益台灣原住民博物館 (未出版)
- 李 紹盛 1973 「台灣的隘防制度」『臺灣文獻』24 (3):184-201
- 林 修澈 1997 『賽夏族の名制』236pp. 台北:唐山出版社
- 吳 文星 1994 「苗栗内山の拓荒者——黄南球」『臺灣近代名人誌』3:11-25, 台北:自立晚報社
- 柯 志明 1999 「從熟番地的分布與保護看清代平埔族「流離失所」的爭議」『台湾原住民国際検討會』台北:中央研究院民族研究所/順益台灣原住民博物館

- 胡 家瑜 1996 『賽夏族の物質文化』 159pp., 内政部專題委託研究計畫報告
- 施 添福 1996 「清代台灣竹塹地域の土牛溝和地域發展」『臺灣史論文精選』(上):157-219, 台北:玉山社
- 翁 佳音 1988 「日治時代平埔族の調査研究史」『臺灣平埔族研究書目彙編』 49-67, 中央研究院民族学研究所
- 張 隆志 1997 「追尋失落的福爾摩莎——台灣平埔族群史研究的反思」『臺灣史研究一百年:回顧與研究』 黃富三/古偉瀛/蔡采秀〔編〕, 257-272, 中央研究院臺灣史研究所籌備處
- 1999 「從《岸裡文書》看清代台灣平埔族群的社會生活——對於「平埔族母系社會論」的再思考」『契約文書與社會生活——臺灣與華南社會(1600-1900)檢討會』中央研究院臺灣史研究所(未出版)
- 盛 清沂 1980 「竹桃苗三地開闢史(上)」『臺灣文獻』 31(4):154-176
- 1981 「竹桃苗三地開闢史(下)」『臺灣文獻』 32(1):136-157
- 黃 榮洛 1994 『渡台悲歌——台灣的開拓與抗爭史話』協和台灣叢刊 7, 311pp, 台北:臺原出版
- 衛 惠林 1956 「賽夏族的氏族組織與地域社會」『臺灣文獻』 7(3-4):1-5

洋書(アルファベット順)

Barth, F. (ed.)

- 1969 Introduction. *Ethnic Groups and Boundaries*. p. 9-38, Boston: Little, Brown. (和訳)「エスニック集団の境界——論文集『エスニック集団と境界』のための序文」『「エスニック」とは何か——エスニシティ基本論文選』 23-71, 新泉社

Jenkins, Richard

- 1996 Ethnicity etcetera: social anthropological point of view. *Ethnic and Racial Studies*. 19(4):807-822
Mahmood, Cynthia K.
- 1992 Do Ethnic Groups Exist?: A Cognitive Perspective On the Concept of Cultures. *Ethnology* vol. 31